

特集 I. 魚病由来菌の薬剤感受性と耐性

Symposium I: Antibiotic Susceptibility and Resistance of Fungal and Bacterial Isolates from Diseased Fish

特集 II. 畜・水産物中の残留抗菌性物質の検出法

Symposium II. Methods of Inspection for Residual Antibacterial Agents in Livestock Farm Products and Marine Products

今回のシンポジウムにあたって

高橋 勇 (日本獣医畜産大学)

今回のシンポジウムでは、まず第I部としては本会の事業を魚病領域まで広め、水産関係者にもご参加いただこうという、数年来の基本方針に従って、窪田三郎先生(日獣畜大)に企画をお願いした。その結果、まず特別講演として「魚類の免疫機構」の題名で、北尾忠利先生に講演をお願いすることとなった(前項に特別寄稿として掲載)。次いで「魚病由来菌の薬剤感受性と耐性」のテーマのもとに、魚類の病原菌のうち真菌及び各種魚類病原細菌の薬剤感受性と耐性について、それぞれ畑井喜司雄先生(日獣畜大)及び青木宙先生(宮崎大)に講演をいただくこととした。特に畑井先生には魚類の真菌症についても解説をいただくようお願いした。

これまで、本会のシンポジウムにおいて、魚病の問題に関しては第13回(昭和61年)のときに、前記の窪田先生に総説的な特別講演をお願いしたことはあったが、魚類病原菌の薬剤感受性と耐性の問題はまだ取り上げたことがなかった。そこで今回、上記のような主旨から、この問題を取り上げた次第である。

今回の企画によって、獣医学及び魚病学関係者が一堂に会し、相互に知識や意見を交換し、かつ今後も相提携しつつ研鑽を重ねてゆく糸口となれば幸いである。

次に第II部として、近年の公衆衛生上の大きな課題である抗菌性物質の残留問題に関し、「畜・水産物中の残留抗菌性物質の検出法」というテーマで、最近開発された二つの検出法、すなわち生物学的検出法及び免疫学的検出法について、それぞれ神保彦彦先生(都衛研)及び伊佐山康郎先生(麻布大)に講演いただくこととした。

これまでの本会のシンポジウムにおいて、残留の問題に関しては、特別講演として、第6回(昭和54年:米沢昭一先生)、第11回(昭和59年:高島英伍先生)、第16回(平成元年:小野浩臣先生)にそれぞれ総説的な講演をお願いしたことはあったが、残留の方法論をとりあげたことはまだ一度もなかった。

そこで、今回は、前記のような画期的な新しい検査法が前後して登場してきたことにかんがみ、本会としては、その開発を進めてこられた上記2名の方に、その方法と意義に関して解説いただくこととした。これらの方法の価値が、今回のシンポジウムを機会に十分に畜・水産関係者に認識され、今後広く普及してゆく動機となれば幸いである。